卒業論文

――準備から提出まで――

山崎　一穎

〈論題決定にあたって〉

卒業論文の論題決定にあたって留意したい事は、自己の抱えている内面の問題と、対象とが常に切り結ぶ所から発想される事である。その為には日頃広範囲の読書から問題意識を養なう必要がある。文学専攻の学徒にとって、読書は趣味でなく宿命であることを銘記すべきである。

次に作家論は作品論を通過せずして成立し得ないことに注意したい。また、作品論はそれが作家論の糸口になる所まで踏み込んで考察することが必要である。

とにかく、卒業論文とは、自己と対象との執拗な格闘であり、対象を凝視することは、自己を凝視することであり、また自己告白でもある。それは諸君等の〈存在証明書〉となり得るものである。それ故に、小さくて大きな一つの世界を構築したいものである。

〈テキスト（定本）選定について〉

古典専攻の場合は、概ね岩波の古典大系本か、朝日古典全書本が善本であろう。近代文学専攻の場合は、出来る限り個人全集本を揃えることが望ましい。ただし、何度も全集本が出版されている場合、最良のものを選ぶことが大切である。先年志賀直哉専攻の学生が、改造社版を購入してしまって、日記を調べる段になって、岩波版でなければ調べがつかないことに気付いた例もある。また、何度も出版されていながら、どれも完本でない場合は、双方を合わせ見た方がよい。例えば、有島武郎全集は、叢文閣版十二巻、新潮社版十巻、改造社版の三つがあるが、叢文閣版と後の二つのうちいずれか一つを備えれば、有島の業績の全貌をほぼ知ることが出来る。

いずれにしても、指導の先生に一度相談されたい。

〈準備から提出までの年間プラン〉

本学では、卒業論文は五十枚以上、仮綴となっているが、最近は平均七十枚位書いており、製本して提出する傾向になって来ている。各ゼミの事情にもよるが、年々図書館も整備され、発展しつつある現状を考えれば、七・八十枚は書きたいし、苦労して書いたものは、やはり製本する方が望ましい。例え、仮綴で提出するにしても、背表紙位はつけたいものである。書架に並べた時、誰のもので、何について書いたものか不明なのは、寂しいことである。

次に各ゼミの方式があるので一概には言えないが、四月の初めに各自〈計画書〉を書いて、指導教授に指導を受けることが望ましい。一例を参考までに挙げておきたい。

卒業論文計画書提出について

＊　提出日　四月の最初のゼミの時間

＊　二〇〇字詰原稿用紙使用

＊　教育実習その他の実習に行く人は別紙に〇月〇日～〇

月○日迄と書いて提出。

＊表紙

（例）

○○先生提出
卒業論文計画書

森鷗外研究
——その歴史小説について——

四年A組○番
○○○○

＊P・1　使用全集名

（例）森鷗外全集〈全八巻・別巻一〉
昭和三十四年三月十日筑摩書房刊
注＝中央に書くこと。
発行年月日は第一回配本の奥付とする。

＊P2～3　なぜ卒業論文の題目として選んだのか。その理由。

＊P4～11　どんな事をどんな方法で追求するつもりなのか。
具体的に述べること。

＊P12　白紙（後で目次記入のため）

＊P13～14　使用予定の参考文献目録

（例）長谷川泉『続森鷗外論考』（昭和四二年一二月二日、明治書院刊）

草部典一　『さんせう大夫』について—伝説と説話の世界　「文学」（昭和二十九年一月）
注＝一行一冊

＊P15～16　白紙（指導教授の方で指導事項を記入）

＊裏表紙

更に、各自大凡の年間計画を立てて、学習の方向を定めたい。次に一例を示しておきたい。

四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

〈卒業論文計画書提出〉
原典精読（ノートを取りながら、または、カードを作成）
〈文献蒐集〉
原典精読したノートと他の研究論文等を比較検討しつつ、疑問点を整理。更に精読しつつ、自己の論理を固める。
下書きから推敲へ
（下書きは、やや大目に書き〈九〇～一〇〇枚〉、推敲の段階で、七〇～八〇枚に絞ると良い。）
清書・製本・提出。

〈文献蒐集にあたって〉

あくまでも原典とじっくり取り組むことが第一義である。その上で、他人の秀れた論文を読む事が大切である。その為には、図書館の活用が必要である。公のものとしては、国立国会図書館、近代文学館等があり、他大学の図書館、大東急記念文庫、清嘉堂文庫、宮内庁書陵部等の閲覧も必要になろう。国会図書館、近代文学館をの

ぞいて、いずれも図書館の紹介状が必要なので留意したい。

閲覧に際し、注意したいことの一つは、インクを使用しないこと。貴重な文献を汚すことは許されない行為である。かならず、エンピツを使用のこと。次に留意したいのは、文献をコピーしたら、必ず文献の表に奥付によって、刊記を記入しておくこと。例えば、藤井公美氏の『明治文学と鷗外』――まひめを対象として――という論文をコピーした場合、奥付によって、「歴史公論」（第七巻第六号、昭和十三年六月一日、雄山閣発行）とする。特に雑誌の場合第〇巻第〇号が落ち易いので注意したい。

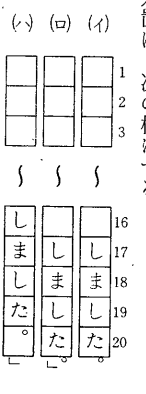
蛇足ながら、文献は夏休み中に蒐集した方が望ましい。帰省する諸君は、文献を蒐集した後、帰省するとよい。

〈論文作成上の原則〉

論文作成にあたって、特別こうしなければならないという規則があるわけではない。更に古典と近代文学の場合では若干相違もあろう。以下、常識的な原稿用紙の使用法と、いかにしたらきれいに見えるかという視覚的な立場から述べてみたい。卒業論文を仕上稿と考えることを前提とする。すなわち、諸君達が一冊の本を造るのだと考えてくれれば良い。

① 一文字一マスを原則とする。よって、句読点、引用のカギ括弧も各々一字分となる。

但し、句読点、カギ括弧の結びは、文頭に出さない。その場合の処置は、次の様にする。

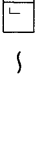


② 文章の書き出し、改行は一字下げる。

③ 引用文は、カギ括弧「……」を用いる。但しその引用文中に会話文が入り込んでくると、「……『……』……」と煩瑣になるので、近代文学関係の論文では次の様な処置も見られる。例えば三好行雄氏は、

引用文を〈……〉とし、その中の会話文を「……」を用いている。

私は、引用はやはり「……」が望ましいと考える故に、次の様にしている。



(イ) 〈――「　」――〉　(ロ) 「――〈　〉――」

(イ)(ロ)どちらでもよいが、論文に於いては統一して用いることを忘れないように。

④ 誤字、当て字は言うまでもないが、諸君等は国文科の学生である故に、略字も慎みたい。

⑤ 作品名、単行本名、論文名の表記は二重カギ括弧を用いる。例えば、

『破戒』、『市井にありて』、『破戒』論考』。雑誌名、新聞名は一重のカギ括弧を用いて区別をする。例えば、

「文学」　「東京朝日新聞」

⑥　引用文を独立させる場合の注意事項について、二・三述べたい。

(イ)　引用文はあまり長いと焦点がぼけるので、二〇〇字以内に留めたい。その場合傍点を打つ等の工夫も必要であろう。

(ロ)　会話文をそのまま引用する場合は、引用のカギ括弧は不要である。

(ハ)

1	2	3	4	5	6	7	8	9						16	17	18	19	20
『	破	戒	』	に	於	い	て	、	～	～	～	～	～					
											×	×	×	×	×	×	×	
		×	×	×	×	×	×	×										
	×	×	×	×	×	×	×	×										
×	×	（	七	ノ	一	）												

天を一字（あるいは二字）あける。必然的に文頭は二字あるいは三字下げる事になる。

(ニ)　引用文の最後に（第七章の一）という事を明記しておきたい。行を改めてもよい。この場合も一字一マスであるが、アンバランスに感じたら、一マスに二字入れてもよい。

(ホ)　引用文の途中を省略する時は、――（中略）――とするか、――……――とする。（中略）は四字分になるが、バランスが悪ければ、一マスに二字入れて、二字分で処理する。いずれにしても、文頭文末には省略の記号を用いないこと。

⑦　文章を強調する場合は、

(イ)　傍点　(ロ)　傍線　(ハ)　挟み込み・〈怨念〉

⑧　研究論文の引用について述べたい。これが一番大切な項目である。卒業論文作成にあたって、自分の意見と他の論文等を明確に区別をすること。すなわち、卒業論文の終りに〈参考文献〉として、使用した文献を列挙するのもあいまいでいけない。次に示す様にすべて〈注記〉を付けること。それが〈参考文献〉に相当するものである。

(イ)　研究論文の引用が、途中で入って来る場合。

『	破	戒	』	に	つ	い	て	、	○	○	○	○	氏	は	「	×	×		
×	×	×	×	×	×	×	×	」	（	注	1	）	と	述	べ	て			
い	る	が	、	私	は	賛	成	し	が	た	い	。	そ	の	理	由	は		

(ロ)　研究論文の引用を独立して使用する場合の二例について。

(a)

『	破	戒	』	に	つ	い	て	、	○	○	○	○	氏	は					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
と	述	べ	て	い	る	が	（	注	1	）	、	～							

(b)

『	破	戒	』	に	つ	い	て	、	○	○	○	○	氏	は	次	の			
よ	う	に	述	べ	て	い	る	（	注	1	）	。							
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
し	か	し	な	が	ら	、	私	は	～										

引用文の表記の仕方は⑥以下に同じである。ここで説明した(ロ)

の(b)の場合は、引用文の次の文章接続に十分留意しないと、文章が孤立してしまう。

⑨ 〈注記〉の表記の仕方について述べておきたい。章の終りに付けるか、一連番号にして、論文末に一括させるか、二通りの方法が考えられる。

〈注〉

1　三好行雄『島崎藤村論』（昭和四十一年四月
三十日、初版、至文堂刊）所収の『破戒
論への試み』、一二六頁。
2　「文学」（第〇巻第〇号、昭和二十六年〇月
〇日、岩波書店発行）掲載の勝本精一郎『「
春」を解く鍵』、〇〇頁。
3　注1に同じ。但し、一二八頁。

章の終り方にもよるが、注記はページを独立させ、二行開けて、三行目に上から四・五字開けて、〈注〉とする。更に一行開けて、右の例の如く一マスに二字入れるようにすると、奇麗に見える。

⑩ 〈付記〉の書き方について、例を示しておきたい。行間の取り方は、〈注〉と同じ。

〈付記〉

1　本論文作成にあたって、定本を『藤村全集』
（全十七巻・別巻一、昭和〇〇年〇月～〇〇
年〇月、筑摩書房刊）としました。本論文中
の引用文は、すべてこれに依りました。
2　本論文作成にあたって、〇〇氏、並びに、
〇〇図書館のお世話になりましたことを、併
せ記るして、感謝の意としたい。

付記の2は、図書館長の紹介状で閲覧した場合は必要であろう。2の項がない場合は、1の項のみでよい。その場合番号は不要。

⑪ 〈章〉と〈節〉との行間について述べておきたい。

第一章　歴史小説の主題と方法

第一節　『意地』の世界

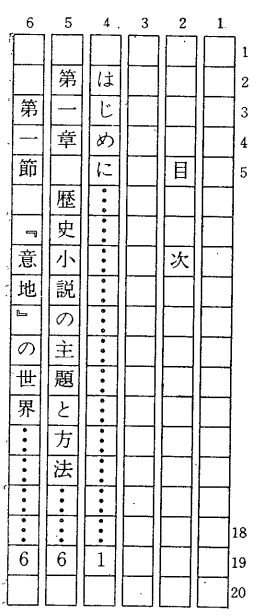
×××××××××××××××××××
××××××××××××××××××

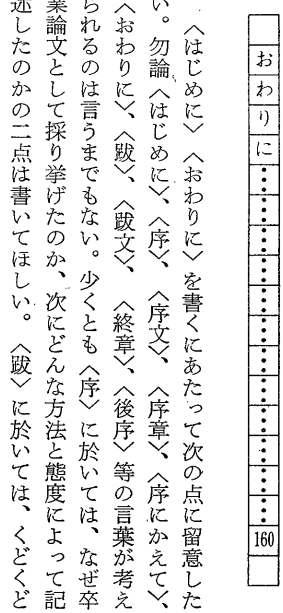
章が替るごとに、独立のページとする。第一節が終って、続いて第二節を書いて行く場合は、次の様にする。

⑫ 補足として、次の事を述べておきたい。和歌など二行にわたって表記すると、落着きが悪い場合は、マス目に囚われず、一行書きにした方が良い。

論文中に他の研究者の論文を引用する場合は、〇〇〇〇氏はとする。〈注〉の項は不要。但し、学内でお教えを受けている先生の論文を引用する場合は、氏を用いず、〇〇〇〇先生とする方が望ましい。

⑬ 目次の書き方について、述べて置きたい。





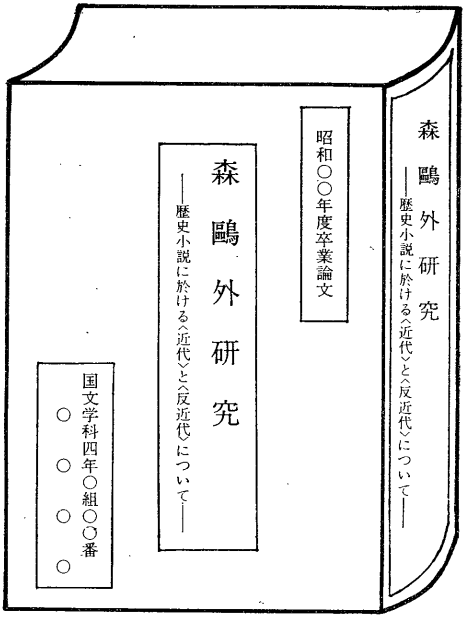
⑭ 〈はじめに〉〈おわりに〉を書くにあたって次の点に留意したい。勿論〈はじめに〉、〈序〉、〈序文〉、〈序章〉、〈序にかえて〉、〈おわりに〉、〈跋〉、〈跋文〉、〈終章〉、〈後序〉等の言葉が考えられるのは言うまでもない。少くとも〈序〉に於いては、なぜ卒業論文として採り挙げたのか、次にどんな方法と態度によって記述したのかの二点は書いてほしい。〈跋〉に於いては、くどくどと反省を述べるのは好ましくない。少くとも、追求の十分でなかった点を踏えながら、将来の展望で結びたい。

⑱ 論題も論文のうちであることを考え、慎重につけること。単に夏目漱石研究では困る。かならず、副題を付けて論文の輪郭を明瞭にしたい。例えば、夏目漱石研究――初期作品に見られる〈夢幻〉について――という具合に。なお、「――」論、論考、私論、試論、私見、考察等の語彙を十分吟味して付けたい。

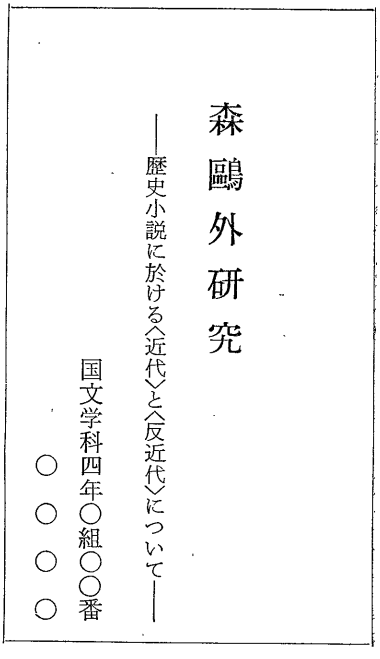
〈製本するにあたって〉

原則は仮綴で良いのだから、無理に製本する必要はない。しかしながら、美酒は玉杯に盛るの喩えもある如く、苦労して仕上げたものに対して、きれいに装丁してやりたくなるほどの愛着を持ちたいものである。製本も画一的なものよりも、和装本仕立でも洋装本仕立でもよいし、紙などにも心をくばればなおすばらしい。父の形見の着物で装丁した人もいたと聞いている。各自で工夫してみたら、独創的なものが出来あがるであろう。

1 〈表表紙〉



2、〈遊び紙〉
3、〈卒業論文提出用の用紙〉
4、〈内題〉
各自の個性を生かした用紙を使用。単に原稿用紙を裏返して使用しても良い。



5、目次
6、本文
7、参考文献、の順で製本する。